

へびの天のぼり 岡山県

むかし、あるところに、へびがたくさん集まって、寄り合いよあひをしていました。

一番年上のへびがいました。

「なあ、おまえたち。これから天にのぼろうじゃないか」

ほかのへびたちは、

「天にのぼるといったって、どうやってのぼるんだ」といいました。

「あんな、わしが一番先にのぼっていくから、次のやつがわしのしっぽに食いついて、そのしっぽに次のやつが食いついて、そうやってのぼりゃいいんだ」

「そうか、そんならのぼろう」

そこで、一番年上のへびがのぼり始めました。そのしっぽに次のへびが食いつき、そのしっぽに次のへびが食いつき、そのしっぽに次のへびが食いつき、そのしっぽに次のへびが食いつきして、ふらふらふらふら、ふらふらとのぼりだしました。まあ、長いこと、ふらふらふらふら、ふらふらのぼっていききました。

だいぶのぼって、天に近くなったところで、一番先のへびが、みんなに、

「天に近くなったぞう」といいました。すると、次のへびが、

「おう」と答えました。そのとたん、口がしっぽから離れて、ばたばたと、みんな落ちてしまいました。

一番年上のへびだけ天にのぼって、後のへびはみな落ちたという話。

おしまい

村上郁再話

資料『蒜山盆地の昔話』稲田浩二・福田晃／三弥井書店